



国名	マラウイ共和国 (Republic of Malawi)
面積	118,484平方Km (日本の約1/3)
人口	1756万人, 人口増加率2.9% (2018年: マラウイ国勢調査)
首都	リロングウェ (Lilongwe)
独立	1964年7月6日
言語	英語(公用語), チェワ語(国語)
政体	共和制
大統領	ラザルス・チャクウェラ



日本マラウイ協会理事 水谷 恭二

3月13日、2023-4次隊修了式にふくしま青年海外協力隊の会を代表して出席してきました。24か国85名が修了、4月から7月に順次、赴任予定です。マラウイへは、8名が4月22日出発予定だそうです。

3月7日、マラウイ派遣予定の候補生に、ウオームハートプロジェクトとマラウイへの協力隊50年の歩み、シマを食べたいとお話しました。

マラウイ日本大使館主催 天皇誕生日 祝賀レセプション

日本マラウイ協会理事 仲井 利明

2月22日現地時間16時よりマラウイ日本大使館主催の天皇誕生日祝賀レセプションに出席いたしました。

大矢大使は挨拶で、マラウイ共和国と日本との結びつきを強調されました。本年はマラウイ共和国建国60周年に当たり200名以上の方々が参列されました。政治・経済界から大臣を含め企業のオーナーら多くの方々にお会いする事が出来ました。今後日本とマラウイ共和国の繋がりが一層強化できる事を期待できました。



訃報

藤村 俊作さん 当会元理事。1月3日、病氣療養中死去。青年海外協力隊員(1975年4次隊、土木施工)としてマラウイ・リロングウェで活動。ご冥福をお祈りします。

日本マラウイ協会 入会ならびに年会費納入のお願い



当会は、両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的として1983年2月26日設立した任意団体です。会員が納入する会費で運営を行っています。ご入会、会費納入をお願いいたします。

Homepage www.japan-malawi.org
Email info@japan-malawi.org
Facebook facebook.com/japan.malawi
Twitter twitter.com/JpMalawi
YouTube Malawi Society of Japan

区分	入会金	年会費	備考
正会員	1,000円	3,000円	
賛助会員	0円	1,000円	郵便物送付無し
団体会員	3,000円	10,000円	公的・非営利団体
法人会員	10,000円	30,000円	協賛企業

※会費適用期間: 4月1日から翌年3月31日まで

支払方法	口座情報等
銀行振込	三菱UFJ銀行 東恵比寿支店(普)0255739 日本マラウイ協会事務局
郵便振替	ゆうちょ銀行 〇ー九店(ゼロイチキユウ店) (当)0013125 日本マラウイ協会 ゆうちょ銀行送金: 口座番号00190-7-13125
PayPal	ホームページ「募集」ページ下部(Card払可)



KWACHA

http://www.japan-malawi.org info@japan-malawi.org

マラウイ共和国独立と日マ外交関係樹立60周年

両国の絆の深まり願う

日本マラウイ協会会長 西岡 周一郎



今年はマラウイ共和国の独立60周年にあたると同時に、日本とマラウイ外交関係樹立60周年でもあります。会員を代表し、心からお祝い申し上げます。

“Warm Heart of Africa”と呼ばれるマラウイは独立以来戦争や大規模な紛争がなく、平和を享受してきた稀有な国です。鉱物資源には恵まれていない内陸国ですが、マラウイ湖を始めとするその美しい自然と農業の可能性を活かし経済的な豊かさを目指してきました。多様な民族が共存し、地域共同体を維持し、災害や飢餓も乗り越え平和な社会を維持して来たマラウイの人々のその努力と忍耐強さに改めて敬意を表します。日本とマラウイの長い友好・交流の歴史の中で特筆されるのが、青年海外協力隊事業です。1971年以降、1900人に及ぶ隊員がマラウイの各地に派遣され多岐に渡る分野で活躍してきました。その協力隊帰国隊員が中心となり活動する当会も、両国の伝統や文化を尊重しつつさまざまなイベントやプロジェクトを

通じて交流を深め、相互理解と友好に寄与する活動を行ってまいりました。

この素晴らしい節目の年に改めて歴史の重みと継続の重要性を再確認しています。過去4年に及ぶコロナパンデミックは落ち着きを示しているものの、ウクライナ、パレスチナ、アフリカでも地域紛争が影を落とし、気候変動と各地で起こる災害、必ずしも安定とは言えない国際関係など世界は多くの課題を抱え挑戦を受けています。

食料安全保障、産業振興、気候変動と災害、健康と感染症、教育の質とアクセス、女性や子供の権利など、持続可能な社会を目指すマラウイの課題は、内容は違うものの、日本の課題でもあります。これからの両国の発展・繁栄にはこれらの課題をより良い方向に転換し解決を目指す取り組みが必要です。当会がこれからも両国の友好と協力を支える努力を続ける事で、日本とマラウイの絆がより一層深まり、共に歩む持続可能な未来が明るく幸多いものとなる事を願ってやみません。

The Remarkable Milestone of 60 Years of Independence

Message for KWACHA Readers

HE Kwacha Chisiza, Ambassador of the Republic of Malawi



Six decades have passed since our nation witnessed its most significant event in history. This year, as we celebrate the remarkable milestone of

60 years of independence, we reflect on the rich tapestry of history, culture, and progress that defines Malawi as the warm heart of Africa. From the serene shores of Lake Malawi to the majestic peaks of Mulanje Mountain, Malawi's natural beauty is paralleled only by the resilience and spirit of its people.

In this moment of celebration, we also honour and commemorate the enduring 60-year diplomatic relations between Malawi and Japan. This dual celebration marks a profound moment, highlighting the steadfast cooperation and progress achieved through mutual understanding and collaboration. The robust diplomatic ties between Malawi and Japan since 1964 have been instrumental in fostering peace, stability, and prosperity for our peoples.

We are grateful for the unwavering support and partnership extended by the Government of Japan across various sectors. From Agriculture and Energy, to Education and Infrastructure,

Japan's contributions have significantly contributed to Malawi's development goals.

We also acknowledge the pivotal role played by the Malawi Society of Japan in enhancing the relationship between our two nations. Through unwavering dedication in promoting cultural exchange, fostering understanding, and facilitating meaningful connections, the Malawi Society of Japan has been a beacon of friendship and cooperation. Their tireless initiatives have laid a strong foundation for continued collaboration and mutual respect.

As a nation, we remain steadfast in our efforts, capitalizing on the strides we are making in economic recovery. Our focus remains firmly on directing resources towards our key economic priorities, namely achieving food security, fostering job creation, and promoting wealth generation through the strategic sectors of Agriculture, Tourism, and Mining.

Together with Japan and other partners, we strive to achieve inclusive wealth, self-reliance, and sustainable development, guided by the principles of shared prosperity and common progress.



2023年10月21日
JICA地球ひろば

マラウイ近況報告と交流の会2023



最新マラウイ 訪問報告

日本マラウイ協会理事
仲井 利明

全体報告

マラウイの最新情報に触れる

日本マラウイ協会副会長 柳沢 香枝

2023年10月21日、「マラウイ近況報告と交流の会」を会場（JICA地球ひろば）とオンラインのハイブリッド方式で開催しました。当日は、会場に在日マラウイ大使館のグレース・ソコー等書記官ら約20名、またオンラインで25名が参加しました。

第一部ではマラウイから帰国した元JICA海外協力隊員や、マラウイを訪問して活動した大学生らの報告があり、第二部の交流会では、報告を元にフリーな意見交換が行われました。ここ数年、コロナ禍で行き来が大きく縮小されていたので、参加者にとってはマラウイの最新情報に久しぶりに触れる機会になりました。会場には、全日本高校模擬国連大会でマラウイの国連代表部大使を演じる予定の高校生も参加するなど、マラウイへの関心が少しずつ高まっていることを実感しました。発表者、参加者とも若い世代が中心で、まさに「マラウイの今とこれからのつながり」を副題とした今回のイベントにふさわしいものでした。

第1部

マラウイから帰国直後のOV、学生が熱い報告

日本マラウイ協会理事 新関 郁子

第一部では、2023年に帰国した協力隊OV3名と同年夏にマラウイを訪問した二大学の学生によるマラウイの近況報告を行いました。

井上里奈さん（小学校教育）は、リウォンデの約2500名の児童を有する地域のセンター校で、教師には授業作りや教材作成を指導、児童には算数を教え、成績を飛躍的に向上させました。周囲の人々からたくさんの親切を受けたそうです。

西村亜希子さん（薬剤師）は、リロングウェ県ムスンドウェのコミュニティ病院で在庫管理や処方監査の改善に取り組み、チーム医療を導入しました。挨拶をととても大切に、日が昇ると同時に起き、日が暮れると寝る生活をする任地の人々を尊び、地域の一員となって伝統行事にも参加されました。

寺門香音さん（小学校教育）は、モンキーベイ教師研修センター配属で、周辺の小学校5校を巡回し表現芸術科目を担当、花びらや葉を絵具にして絵を描くなどの指導をしたり、歌やダンスの発表会を開いたりしました。「マラウイアンになる！」と髪を刈り上げ、シマを作り、現地に溶け込んだ生活を送りました。

筑波大学の遠藤拓馬さん（国際総合学類2年：当時）は、日本マラウイ学生団体というサークルの学友と約2週間マラウイ各地を訪問、小学校での交流活動やシマ作りにも挑戦して見聞を広げました。特に印象に残ったのは子どもたちの笑顔だったとのこと。

清泉女子大学では地球市民学科の鈴木直喜教授（マラウイOV）のご指導の下、マラウイで約2週間のフィールドワークを実施、井口陽夏乃さんと藤倉莉々子さんが、病院や小学校訪問などの様子や、現場を見て感じた課題点、チョンベ村でのホームステイを通して現地の人々の無駄がない生活、生きる力など多くを学んだことを報告されました。

発表スライドの写真や動画には、マラウイの人々の笑顔があふれていました。日本での時間に追われる多忙な日々の中で、ひと時、マラウイに流れる時間を想い、マラウイの人々の逞しさや温かさ、人としての豊かさを想う貴重な機会となったと思います。



第2部

マラウイでの活動から、さらなる挑戦を

日本マラウイ協会理事 川崎 友紀子

第二部では、第一部で活動報告し帰国隊員と大学生に自由討論をしていただきました。今回の帰国隊員のみなさんは病院、学校で活動され、コロナ禍の中、志を強く持ち活動を完遂されたことは立派でした。現職参加の隊員は、現地での活動を日本社会への貢献に活かされると強く思いました。

また、大学生のマラウイにおける国際交流の「活動の質」が向上してきたように思います。コロナ禍以前から筑波大学と清泉女子大学の学生は、マラウイに渡航し現地で教育活動やコミュニティ活動をしていました。コロナ禍で渡航は中断しましたが、再び渡航は復活したようです。今回は、2023年夏のマラウイ渡航（活動）について両大学生に発表していただきました。

卒業した先輩たちも、マラウイ協会と関わりがありました。先輩からの引き継いだ現地でのマラウイ人との交友関係もあってか、渡航前から入念な準備をして、無駄のないマラウイでの活動ができたように感じました。数年前までのことを考えると、想像がつかないほど、活動は充実していたように思います。特に、渡航前からパソコンや携帯を使って現地の情報を入手できるというのは、非常に大きな利点だと思います。その活動成果も青年海外協力隊員の活動とも劣らないくらいの内容でした。現地で両大学に縁のある現地のマラウイアンも、久しぶりに訪れる大学生の訪問にさぞや嬉しかったと思います。今後も彼らの活動が後輩に伝わり拡充すればと思います。

帰国隊員、学生がマラウイでの活動を通して新しい価値観を身につけ、さらなる挑戦をしていただきたいです。

交流の会に参加して

「初めて聞いた！」。「マラウイ共和国」を話題にすると多くの場合、そう言われます。だから「マラウイ近況報告と交流の会」に参加して、マラウイを訪れた方同士で互いの経験を共有出来たことはとても新鮮でした。

私たち同じ大学のメンバーが持っていた視点とは異なる視点からのマラウイを知る事ができ、私自身大きな学びとなりました。同時に、仲間の輪が広がった気持ちにもなりました。

その後は約2週間のマラウイフィールドワークの活動をまとめた報告書の作成に取り組み、今年3月によりやく完成しました。1つの本を0から作る作業に苦戦しました。でも、本当の意味での学びにするため、マラウイでもらった沢山の宝物を形にしようと、メンバー全員で最後まで活動しきることができました。

マラウイを訪れたのはたった2週間でしたが、「マラウイ」という国は私たちにとって人生を通して大きな経験を与えてくれた国だと感じています。これからもマラウイ共和国の発展と幸せを祈っています。

藤倉 莉々子(清泉女子大学4年:当時)

会場には、OVの方たちはもちろん、マラウイに関心のある学生さんやNGO団体の方々もお見えになられて、マラウイの事を考えてくれている方が他にも沢山いらっしゃることを知ることができ、本当に嬉しく思いました。現地の情報網や経験はJOCVの強みだと思いますし、彼らの将来に向けての力にもなれることは嬉しいです。

西村 亜希子（2019年度3次隊 薬剤師。
現在、JICA国際緊急援助隊事務局勤務）

予告

祝！マラウイ独立60周年 マラウイを語る集い

2024年7月20日（土）午後 JICA地球ひろば

内容：2部構成 1 マラウイ関係セミナーなど（詳細検討中）
2 シマを食べる会



昨年の「マラウイを語る集い」参加者集合写真